

【Mrs. ビックと共に;3年に亘る乳幼児観察の体験】 (1987)

Jeanne Magagna

〔原題;Three Years of Infant Observation with Mrs. Bick〕

イントロダクション

かなり以前のことなのですが、Mrs. マーサ・ハリスから私に連絡があり、ソーシャル・ワーカーのための乳幼児観察セミナーを担当してはくれまいかとお尋ねでした。〔当時彼女は、the Tavistock Child Psychotherapy Course の the organizing tutorでした。〕私はそれ以前に一人乳幼児の観察をしたことがありましたものの、セミナーを担当するには自分が適任かどうか不確かさに覚えまして、Mrs. エスタ・ビックに私の赤ちゃん観察をスーパービジョンしてくれるようにと依頼したのであります。ここでMrs. ビックについてご存知ない方のためにお話しておきますと、彼女は成人及び児童のサイコアナリストでありまして、ポーランド出身です。50年ほど昔、彼女はウィーンでシャーロット・ビューラー(Charlotte Buhler)の指導の下に乳幼児発達で博士号を取得しておられます。双生児研究に携わった折など、双生児が互いに‘社会的反応’をする回数を数えるのにストップ・ウォッチを使うように訓練を受けていたということらしいですが、既にこの時点で彼女は、人間のパーソナリティの発達を理解するためには、現況のあらゆるパーソナリティ発達理論によって叙述されているものに拠らず、実際に家族とともに暮らす環境の中で普通に生活する赤ちゃんからまずは学ぶべきではないかという考えがあったということでもあります。そこから1948年に至り、彼女は【the Tavistock Clinic】でサイコセラピ研修生 psychotherapy trainee の指導に就きまして、それはDr. John Bowlbyの要請があったからですが、早速に研修生各自をそれぞれの家庭に訪問させ、子どもの誕生以降2歳になるまでの成長を観察させるといった訓練法を新たに導入したのであります。

私がこれからお話いたします子どもとその家族の観察に取り掛かったのは、Mrs. ビックが79歳の時であります。これは彼女の公的職務としては最後のものでした。Mrs. ビックは乳幼児観察の重要性について3つの論文をしたためておられます。そして彼女は、乳幼児観察が精神分析に貢献するものとして今後大いに推進させてゆかねばと意欲を燃やしておられたのであります。そして観察する上で極めて厳密な基準を設ける人というのが彼女の定評でありました。Mrs. ビックは、観察のごく詳細を、ほんの些細なことでも綿密に、プルーstens的な精密さでもって描写することをわれわれに求めました。それは、彼女が赤ちゃん和家人との間の関係性を把握する上で極力明晰さを得ようとしたからであります。私としましては、赤ちゃんがその生を始めたとき、彼女はまさに生の終焉を迎えんとしているということ意識しておりました。彼女自身が死の不安に神経過敏であることが、尚更に赤ちゃんの崩壊 dissolution への恐怖感について極度な鋭敏性をもたらしたというふうに私には思われました。Mrs. ビックは乳幼児観察に熱烈な意欲を覚えておられましたから、私個人のスーパービジョンであるはずのものが、結局のところ他の参加希望者も加わり、乳幼児観察2回目を体験するところのサイコセラピスト6名から13名ほどが集うセミナーになったわけです。そして、1年の観察期間の予定が3年へと延長

されまして、私はこの間、週ごとにセミナーで観察報告をし続けたという次第であります。

この論文では、この3年間の観察の時期、その開始時、中間期、および最後の辺りで殊に難しさを感じた事柄を検討してみたいと思っております。下記の観点が概ねMrs. ビックの主要な関心事であったものと考えられますので、その線に沿ってお話ししてまいります。

- ・その1)子ども;その家族との関係性について
- ・その2)観察者の役割;母子の不安感をどのように‘コンティン’するか
- ・その3)セミナーの教官及びメンバー各自の役割;観察者をどのように援助するか

最初の段階－新しい仕事に挑む心準備

新しい仕事へ向けてどのような心準備が要るのでしょうか？ Mrs. ビックはまず私が母親を探してくれるプロフェッショナルなワーカー、この場合は「ヘルス・ビジター」ですが、どのように自己紹介すべきか、その詳細を吟味するのに何回かのセッションを費やしました。彼女は、母親に《赤ちゃん観察》についてどのように説明するか、その簡潔な方法を私に示唆しました。＜私は赤ちゃんについて知りたいのです。どんなふうに育てゆくかということですが・・・それが私にとってとても有益だと思われるのです＞といったふうに・・・母親との取り決めの際には、私の訪問が両親のいずれにもどのような影響を及ぼすものかを予め承知しておく意味でも父親に会っておくことが望まれました。又私が父親と会うことは、赤ちゃんの発達にとって父親がとても重要であると私が考えているということが示唆されております。私は極力ごく簡単に、例えば‘赤ちゃんについて理解を得たいと望んでいる者’として自己紹介することになっており、プロフェッショナルであるとか、児童サイコセラピストということでは毛頭ありません。

訪問日時はごく規則的に取り決めることになっておりました。また予め訪問しないことになる期間についても同様でして、クリスマス、復活祭、それに夏季休暇といったことですが・・・セラピーで患者との取り決めがそうであるように、乳幼児観察の場合もその訪問の取り決めは互いにとってごく規則的な約束事 regular commitment でなければならないわけです。この点がごく重要と考えられております。われわれのセミナーでの討議では、訪問が母親に何らかの要求を強いるものではなく、他にも又彼女の日常生活のリズムを乱すことでも、もしくは赤ちゃんの睡眠を邪魔するものでもないと感じてもらえるように、じっくりお互いが馴染み合うことが大事だということが強調されておりました。私はむしろ赤ちゃんとその家族に対して出来る限り‘コンテナcontainer’であり、サポートともなることが求められておりました。家族が私のニーズに見合うべく居てくれるということでは決してありません。ですから、訪問日時の変更は家族に要求を強いることであり、彼らの日常生活を乱すものと考えられました。最初の訪問を控えて緊張する私に、まずは家族に情緒的に関わる emotionally present ということが肝腎だということが諭されたのであります。

初回の観察－男の赤ちゃん; 12日目

母親は背の高い、魅力的で静かな語り口の女性で、20代の後半であります。彼女はまずこんな

ふうに語ってくれました。退院後の家庭での最初の2日間はとても酷かった。しかし今日、私が訪問した日ですが、どうにか赤ちゃんは落ち着いてきたということです。公園で赤ちゃんを乳母車に乗せて、晴れやかに闊歩するご両親をよく見かけることがありますが、彼らはまさにそんな感じだったようです。<まるで誰もが注目しているような感じで、私たちってちょっとバカみたいと感じなの。だって、まるですべてがもの珍しくて・・・>と付け加えます。父親は、とても友好的で、高学歴でハンサムなアイルランド系の医師であります。20代後半です。彼は私の訪問の意図を訊ね、それから赤ちゃんの誕生の前後の様子をあれこれと詳しく語ってくれました。出産の4週間前まではすべてが順調であり、それから赤ちゃんは困難な事態に陥り、帝王切開ということになったとのことでした。彼は分娩に立ち会うことを求め、それで医師と揉めたと付け加えました。結局それは許可されなかったんだとか。彼が赤ちゃんを眼にしたとき、その顔は完全にクシャッとつぶれていて、<まったくのところグジャグジャ、ひどい有り様だった>と語りました。父親は子どもが健全とは言えないのではとひどく気を揉んだようです。赤ちゃんは口蓋に問題があり、それでお乳を飲むのも、或いはいずれ発話するのも支障を来たしはしないかと思ったんだとか。帝王切開と麻酔のおかげで、母親は赤ちゃんを見ることもならず、それで彼が言うには、妻は自分が病院にいるのは赤ちゃんを産むためにというよりも、まるで自動車事故に遭い、入院させられたみたいな感じていたと付け加えました。母親は赤ちゃんを最初の2日間会うことはなかったとか。その間赤ちゃんは集中治療室でケアされていたということでもあります。

こうしたことをわれわれが話している傍らで母親は赤ちゃんにお乳を与えてはいました。彼女が彼を膝の上に立たせてゲップをさせたとき、彼は腕をゆっくりと持ち上げ、それから窓の方をジッと見つめ、足を少しだけ上げました。それからオッパイに戻ります。赤ちゃんの手は軽く握られ、その腕は両脇に収まったままです。膝が持ち上げられ、足の指先は軽く曲がっています。母親の手は彼の足の辺りを軽く包み込んであるものの、赤ちゃんは彼女のからだにぴったりと抱きかかえられてはおりません。看護婦が赤ちゃんを授乳のときは毛布できつく包むようにと言ったとか。だが彼女は敢えてそうはしないのだと言います。なぜなら赤ちゃんはからだを自由に動かすのが好きだったりするかもしれないし、締め付けられるのが嫌いかもしれないと思うから・・・と彼女は言います。それから、どうも貧血ぎみでからだに力がなく、お乳が十分出ないし、だから赤ちゃんが十分お乳を得ていないのではないか心配だと打ち明けます。それで彼の体重を授乳する前後に測ろうと思い、体重計を借りてきたところなんだそうです。この時点で母乳では足りない分、哺乳瓶で補っているということでした。父親が哺乳瓶を用意してくれるのを待っている間、彼女は再び赤ちゃんにゲップを促します。彼は首を持ち上げ、頭を後ろへとのけぞらせます。そして目が母親の顔の方へとまっすぐに向けられます。母親は、彼の背中を撫で、軽くトントンと叩きながら、<赤ちゃんってゲップをするとき、こんなふうに頭を弓形にのけぞらせるわね>と語ります。

父親が哺乳瓶を手に戻ってきました。<ぼくも赤ちゃんのミルクを作るの、もう随分手慣れてきたよ>と言います。彼は、赤ちゃんが哺乳瓶からミルクをごくごく飲み干すかどうか気遣います。父親がその後、赤ちゃんが平らなまま啜っていた乳首にちょっと手を添えてあげたとき、母親が新しいもう一本の哺乳瓶に取替えようとします。新しい哺乳瓶が与えられるのを待つ間、赤ちゃんは首をうしろへとつけ

ぞらせ、母親の顔の方へと向きを変え、それから自分の握りこぶしを音をたてて吸い始めます。

母親が彼をほんの少し動かしたとき、彼の手はだらりと落ち、彼のからだは一瞬動きが止まりました。彼のからだは固まっています。それから口でもごもご動かし始め、それでいくらかリラックスし始めたようです。彼は眼を後ろへと向けて動かします。首を捻って、顔をしかめ、ぐもった泣き声を発します。彼は頭を後方へと何度か押しやりました。その以外の他のからだは全然動きません。赤ちゃんがまたもや少し泣き始めますと、母親は赤ちゃんのお腹をさすります。しかし同じような泣き声が続いたので、母親はオッパイを彼に与えます。〈おそらく全然出ないはずと思うんだけど・・・〉と言いながら。数分ほどして父親がもう一つ別の洗って清潔な乳首を手に戻って来ました。母親は、哺乳瓶だなどのくらい子どもが飲んでいるのか解るから楽だわねということを、いかにも安堵といった面持ちで語りました。

ご夫婦は、子どもに名前を付けることにまだ躊躇っていて決められないんだということを笑いながら語ります。もう6週間もあれこれ思案しているんだとか。父親は赤ちゃんを〈Algie〉と言い、そしてそれが引用されたところの詩 'bump on mother (お母さんにドンとぶつかった)' の詩を暗唱しました。母親は、赤ちゃんは3番目の家族だと言います。それからさらに2週間も子どもに名前を付けるのに手間取った理由というのがどうやら赤ちゃんの鼻のせいでして、最初の頃それが両親と同じようには完全な形を成していなかったからなのです。

母親は赤ちゃんに着換えをさせます。就寝時間の準備です。彼女は、眠るときには別の服を着せなくてはと主張する父親とちよつと口論をします。母親が赤ちゃんを着替えさせている間、〈お客さまを見ているのね、そうでしょ？全然眼を逸らすことが出来ないみたいだわね・・・〉と赤ちゃんに語ります。

私がお暇する準備をしているとき、母親が私に、〈これ以上またお越しいただくのはどうも私、気が進まないんですけど・・・〉と言います。彼女は私の訪問に気乗りしていないのでした。彼女自身、どうしてなのか分かりません。私は彼女に、赤ちゃんのことで慣れぬことがいっぱいあり、その上に私が居るというのはなかなか気持ちが疲れるということがおありでしょうねと一応の理解を示します。ここで父親が私に、〈電話を入れてくださって、翌週においでになるかどうか知らせてくださって結構ですよ〉とってくれました。母親は、まずは差し当たり赤ちゃんに慣れる時間をもっと欲しいのだと言います。彼女は私が居ることに神経質に感じていたのです。父親は彼女の腕に軽く触れ、そして〈翌週になれば、おそらく大丈夫だよ。事態はうんと落ち着いてくるからさ・・・〉と言いました。私は、〈それではいずれお電話いたしますので。どうも訪問させていただき有難うございました〉と述べ、お暇したというわけです。

観察者;セミナーとの関連に於いて

この最初の観察をセミナーで報告するに当たり、私としてはMrs. ビックを内心ひどく恐れました。その怯えのせいで、当初私が赤ちゃんを家族の中で理解するのにあれこれ抱いていた願望などどこかへ吹き飛んでしまったのです。私は母親にも似て、どのように赤ちゃん観察をし、セミナーでどのように報

告すればいいものやら、どうにも恐怖心があったといえましょう。Mrs. ビックは私に完璧な観察者であることを期待していると感じてしまい、でもあまりにもたくさんの非言語的コミュニケーションが起きており、頭の中はまるで紙吹雪が虚空に舞い散っているような具合でしたから、そうした片鱗をなんとか一つずつ捉まえ、それから言葉に繋げて、どうにか語句の連なりへと編込んでゆかねばなりませんでした。

こうして最初の訪問について皆の前で語ったとき、Mrs. ビックは幾つか質問をされました。それらは、それ以降の訪問で、カメラレンズがズームするみたいに、赤ちゃんにより接近し、明白な焦点付けをするきっかけとなりました。彼女の質問は、＜母親はどのように赤ちゃんを抱えていたのか？子どもの頭はどこ？どの程度に母親のからだに近かったのか？彼はどこを見ていたのか？赤ちゃんのからだにどのような動きもしくは静止を見たのか？そうしたことを示してみても下さる？われわれは知りたいのだから・・・＞と。それらの質問を通して、Mrs. ビックは、母親が赤ちゃんをどんな具合に抱きかかえているか、そのクオリティ quality についてより詳細に描写していったのです。またそれに付随して、赤ちゃんがどのように‘自らを抱えている’ holds himself together’ についても・・・毎週、セミナーは前の週の討議から総括されたものをレポーターが発表することから始まりました。そうすることで観察に一貫した継続性もたらされたわけです。それらは、赤ちゃんを巡る家族の情緒的な‘いのちの物語’が語られるといった文学的な筆致で書きとめられてゆきました。

観察者：家族との関係性

セミナーで赤ちゃんの両親との関係性について解釈されてゆく事柄は私にさまざまな影響を与えました。私の観察資料をもとにしてMrs. ビックが推論しますと、いわゆる「目から鱗」的に私の防衛的な‘目’が取り除かれるといったことがありました。そこで赤ちゃん両親とがどんなふうと一緒にいるのかをいっそうその詳細を突っ込んで見てみようと思ふことになりました。しかしながら時として、セミナーでは我が身があまりにも人目に晒されすぎているようにも感じました。赤ちゃんの経験内容がMrs. ビックによってこと細かく描写されたとき、私には赤ちゃんの苦しんでいるさまを見ることは殆ど耐えられない思いがしたのです。母親が子どもに身体的なサポートをごくわずかしか与えないときなど、私は赤ちゃんの経験に私自身の情緒的に抱えられていないといった幼児的な不安感を投影しがちでありました。私は赤ちゃんに同一化し、この母親に対して思わず批判的になるのでした。つまりそれは私の内なる世界の‘悪い母親’というわけですが・・・それで、＜この子はあなたがもっとしっかりと腕に抱きかかえてあげて、ちゃんと頭を支えてやったら、もっと安心するのに・・・＞とつい言いたくなったりしたのです。

赤ちゃんのお尻のおムツかぶれやら頭そして顔の湿疹がひどくなったとき、私は具合が悪くなり、家族の訪問を危うくキャンセルしそうになりました。この私の症状は、Mrs. ビックから赤ちゃんが母親にしっかりと‘コンティン’されていないといった耐え難い不安感について、それが引いては赤ちゃんがその皮膚を‘コンティナーcontainer’代わりに使っているようだとの指摘のあったセミナーの後などにも起こりました。赤ちゃんの不安感に同一化し、私自身が子どものときに味わった耳の痛みとか風邪を引いた折の幼児的な不安感とも交錯してぶりかえし、その結果私は風邪を引いてしまったのであります。そんな

折には赤ちゃんをまともに直視することはもはや出来ないものであります。

徐々に、セミナーでの理解やらサポートを通して、私は家族から我が身に引き受けてしまう投影に対処し得るだけの勇気を得てまいりました。そして身体的にみごとに整った美しい両親もやがて、その容姿からして決して万全とはいえない我が子をどうにか受け入れられるようになってゆきました。母親は完璧な母親でないことを頻りに気にしておりました。私は赤ちゃんにだけではなく、家族のメンバーそれぞれに自然体で極力‘身を預ける put myself in the shoes’ ことを学んでいったのです。それでどうにか私自身の不安感からも距離を保ち、私自身の不安感そして両親から私に投影される不安感を認容すべくメンタル・スペース mental space の保持に努めたというわけであります。これら不安感には、私が批判的で‘あら捜しをする’人であり、招かざる客でもあり、彼らと張り合う専門家ともなり、それで侵入者になっているのではなかろうかといった疑心暗鬼が含まれておりましたでしょう。

私自身が赤ちゃんと家族に対してしっかりと気持ちを向けられる、いい観察者になるためには己れ自身の心の内を整理しなくてはならず、それが山積しておりました。そうしてフィーリングを保持し、同時に彼らについて考えるということをしなければ、私はおそらく彼らとの強い情緒的な掛かり合いから完全に身を引いてしまっていたことでしょう。そうならば、私は有能な‘ビデオカメラ’になっていたかも知れませんが、もしくは‘ナニー’になったりして、つまりは母親と赤ちゃんに対してお役に立つ‘2本の手’となっていたかも知れません。もしそうであったならば、この家族の中に居て、私は自らの子どもはおりませんし、チャイルド・サイコセラピストとしての能力を発揮する自由もなければ、母親よりも自分の方がもっといい母親だという幻想を抱くこともままならないわけですから、唯一の観察者であることで味わうさまざまな心的苦痛 pain から情緒的に解放されていたかも知れませんけれども・・・。

新しいアイデンティティーの模索

母親

母親は明らかにとても不安定な状態でありました。赤ちゃんをどうあやして宥めてやれるものか分からないということは耐えられないのでした。彼女は赤ちゃんがこれから無事生き残れるものか心配でなりません。彼女は果たして赤ちゃんを生きながらわせることが出来るものかひどく気掛かりなのです。最初の頃、彼女は父親や看護師の助言に対して敢えて反抗する態度でした。彼女にしてみれば、他人に助言されることは、自分がどうすべきか何も判っていないといった批判として感じられたのです。彼女は看護師に赤ちゃんを包んでやり、固くしっかりと抱きかかえなさいと助言されたわけですが、それとまるで逆をすることで彼女の内なる迫害されている感じから必死に身を護ろうとしております。父親に対しても、彼が赤ちゃんの吸う哺乳瓶の乳首に触れた途端すぐさま洗うようにと言い張ったわけですが、そこにも彼女の迫害されている persecuted 感じを示しております。それに彼女は強い憧憬と愛情を抱くところの彼女の母親に来てもらうことがまだ出来ずにいました。赤ちゃんに対して適切にケアできることを示せるまでは見せられないというわけなのでした。母親の抱く迫害感、私との関係性にも転移され、彼女は初回の訪問時に私に＜もう戻ってこないで＞ということをおっしゃっております。母親が1ヶ月

目の赤ちゃんに入浴させて、彼が泣いた折に、彼女はその泣き声を自分がちゃんと母親らしいことが出来ていない証拠と見做したのです。彼女は、完璧な母親でなければならないという内心の要求に圧倒されていたのです。己れ自身については何ら求めてはならない、無 nothing でならなければならないというわけです。こうした迫害的な要求が彼女自身母親としての良き能力を活かすことを妨げていたといえましょう。

明らかに赤ちゃんの誕生は母親の中に、突然の甚だしいアイデンティティーの喪失感を覚えさせたということのようであります。彼女はもはや有能な大人ではないということであります。ほっそりとした綺麗な女性でもなく、以前のような優秀な司書でもありません。彼女は自分が今誰になっているのか戸惑っているのです。母親としての新しいアイデンティティーをまだ確保できてないわけですし…。彼女の戸惑いと過去のアイデンティティーの喪失の痛みとが、このちっちゃな無力な赤ちゃんへの責任感と相俟ってさらに募らせていったわけです。しかし彼女はまったくのところこの任務 task には及び腰であります。彼女は己れ自身がまるで新生児そっくりに、突如として脆く傷つきやすく、真裸で抱えられていないように感じられたのです。そして赤ちゃんは母親に反応し、そして彼女によって慰められることによって、むしろ母親の迫害感をいくらか軽減させてあげたことになります。彼は彼女に‘良き母親’としての新しいアイデンティティーを見出す手助けをしてあげたともいえましょう。つまりは、乳房にしっかりと吸い付いて離れないといったことで、彼は彼女を欲しかつ必要としていることを示しておりましたし、彼女が彼のニーズに相応しい行動が出来ず、彼を泣かせたりしても、彼はすぐにそうした彼女を許してもあげられたわけですから…。

父親

最初の数週間、父親はしっかりと赤ちゃんをその懷に抱きかかえておりましたし、赤ちゃんを安心させてあげられたという点では母親よりもずっと得手だったといえましょう。また彼は母親に大いにサポートをもしております。時として父親としての彼の有能性 competence は、‘内なる良き両親’との同一化に基づくものであったでしょう。他にといえば、その有能性は‘超一両親 super-parent’との投影同一視に基づいたものとも覗われました。この投影同一視の活用に拠って、彼は幼兒的不安感を母親と赤ちゃんに投影し、そして自らは熟練者、つまり母親然とした態度を取ることに手慣れていると感じられていたものと思われます。こうした状況では、良き親であることは母親との競争意識から芽生えていたわけでもあり、それもしばしば母親の傍らに‘占拠’している赤ちゃんへの彼自らの幼兒的な嫉妬心と闘うためだったともいえましょう。

赤ちゃんが3週間目になった頃、父親は妻が母親として振舞うことに不安げであることにいっそう気遣うようになります。赤ちゃんを抱くときなどは、まずその前に彼女に＜抱いてもかまわないかな？＞と訊きました。しかしながら、赤ちゃんにとっての母親という主要な位置を彼女に与えながらも、父親の赤ちゃんへの嫉妬心は露わになってゆきます。例えば、次のような事態であります。赤ちゃんが3ヶ月目になって母親と観察者とがバスルームに居て入浴させていたとき、父親はその狭いバスルームに入っ

てきました。手に彼自身が赤ちゃんのときの写真を持っていました。彼は赤ちゃんがその写真の赤ちゃん、つまり彼自身に似ているかどうかと私に訊きます。今や、赤ちゃんが彼よりもうんとたくさんケアされているように感じ、それで自分が‘落っこたされた’みたいにも、また無視されてるような感じ、父親は防衛的に赤ちゃんと同一化しているようであります。彼は私に、<ほらほら、見て！ 僕が赤ちゃんのときの写真だよ>と嬉しそうに言いました。

観察者のアイデンティティー

私はセミナーの皆に、<赤ちゃんをどうしたらもっと十分に‘一人の人 person’らしく心に描けるかよく解らないの。観察の詳細をもっと読みやすく、そしてより生き生きと描写できるようにしたいんだけど、助けてくれるかしら？>と伝えたのです。Mrs. ビックは、<母親があなたの描写の中ではより重きが置かれているわね。赤ちゃんはまだ‘見知らぬ対象 a strange object’でしかない。彼という存在は、まだあなたの描写のなかでは纏まってもいないし、しっかりしてもいない。彼が泣いているときとか、腕をあげて頭を後ろへとつけざらせたときとか、そこにはどんなフィーリングが垣間見られたのかしら？ 顔の表情はどんなふうだった？>と私に訊いてきました。

私自身が両親にも似て、赤ちゃんのアイデンティティーを感じたり、又観察者としても自らのアイデンティティーを見出し得ずにいたわけです。母親は、<赤ちゃんって、まるで大きな塊りでしかないみたいだわね。見知らぬ人、侵入者ってことだけど…。この最初の数週間はね…。>とっておりました。それはまた、私自身がこの家庭のなかに居て、感じていたとおりなのです。私はまたセミナーに対してもまるで自信がなく、不適切と感じており、そしてこの不安を抱えがちな両親に対してもそうであったのです。

セミナー・メンバーのアイデンティティーの感覚

この最初の段階では、セミナーの誰もが、私を含めてですが、事実上黙ったまま、唯Mrs. ビックが奏でることばの音の響き・シンフォニーに聞き耳を立てるだけでありました。誰もが、われわれ全員これが2回目の乳幼児観察であることなぞ知りませんでした。その多くが自ら子どもがおり、また殆どがチャイルド・サイコセラピストとしての資格を得ております。それがMrs. ビックの語る母親そして赤ちゃんの早期の不安感についての智慧 wisdom を受け取るだけの人 passive recipients になってしまっていたわけであります。われわれは自分の考えを敢えて声に出すことを憚っていたのです。Mrs. ビックの考えに逆らうことを恐れて…。この受け身性 passivity を惹き起こしているのは、Mrs. ビックへの尊敬心ばかりではありません。もしもわれわれが違った考えを持っているとしたら、われわれがそれぞれのアイデンティティーを持っているとしたら、われわれは‘要らない子 the unwanted baby’になってしまうのではないかと怖れ、それで彼女の考えに平和的に同調することに収まっていたといえましょう。それは、このセミナーに特有の奇妙な事態だとは考えません。グループの受け身性 group passivity とは、すなわちメンバー各自がエキスパートによって滋養を与えられることに幼児的に依存しているに見做していいでしょう。それはおそらく、乳幼児観察セミナーのリーダーがまず最初に対処しなくてはならない最大の厄介な事柄といえそうです。

第一期(最初の4ヶ月間)の赤ちゃん観察の総括

Mrs. ビックは赤ちゃんについてこう語りました。<赤ちゃんというのはね、宇宙服を着ないで宇宙へと投げ飛ばされた宇宙飛行士みたいなもので、だから自分のからだが一つの纏まりを得られるようなものは何一つ持たないわけ。この赤ちゃんは生き残りの強い能力があるわね。おそらくこれは胎内で穏やかで落ち着いた空間にどうにか身を安定せんとして葛藤していたことに関係している。殊に母親が赤ちゃん誕生の直前に祖母の死に遭遇し、それで情緒的な動揺を来たしていたときにだわね…。彼は又とても知能の高い子どもで、生まれつき強靱な体質とも言えそう。彼は生死をさまようような葛藤に直面し、そしてコンテンツングしてくれる逞しい母親が不在であったにも関わらず、彼自らをしっかりと身体的にも心理的にも適切に抱えることができたわけだから…。おそらく彼は実に尋常ではない不安感 insecurities に対処して自力で彼流の方法に頼らざるを得なかったに違いないわね>と…。

この早期の段階で、赤ちゃんの防衛方法に或るパターンが見られ始めてまいります。3週間目のこと、赤ちゃんは衣類を脱がされてまったくの裸でおりましたが、極度に怯えきった様子で、泣き叫び、顔を真っ赤にし、足をすばやく蹴り出して、目の前に腕を振り回し、ゲップをし、少しだけ排便をしました。こんなふうに間断なくからだを動かし、恰も彼はそんなふうにながむしゃらに自らのからだを一つの纏まりとして抱え込もうとしていたみたいなのです。彼は静止せず動き続けることで、行き詰まり dead end の恐怖に抗っていたともいえます。そしてその功も奏せず、彼の抱え切れない情動の嵐、感覚的な経験が溢れ出て、‘外側へと漏れ出てゆく’かのように見えました。母親が彼に触れてあげるまでは…。それから彼は静かになりました。泣き声が止み、一時的にせよ穏やかな顔の表情になりました。母親が彼に触ったとき、彼は抱えられ、なんとか‘落下し、木々端微塵になる’といったことは防げられたようです。母親の手触り touch には付着 adhesion 的な意味合いがあり、すなわち母親とくっついているといったフィーリングを赤ちゃんのなかに再び確立させる、そうした力が派生するといえましょう。

絶えずからだを動かし、そして背中を固くし、首の辺りと頭を後ろへとつけざらせる以外にも、赤ちゃんは、静止したまま体を丸め、からだを‘溶けて流れ出てしまわないように’自らを抱え込んでいたといえましょう。3週間目に、彼のオムツが取り除かれたとき、彼の足はすぐに胸の辺りへと寄って丸まったのです。母親が部屋から去ったとき、彼の眼、口、そしてお腹のどれもが、彼が己れ自身を固く抱えている間、じっとしたままでありました。母親が戻ってきたとき、赤ちゃんは彼の眼を開けて、彼女の顔にすがりつきます。そのように抱えられている間、彼は彼の足を穏やかなリズムで揺らしておりました。母親が近付いたときの彼のこの穏やかな足の動きは、赤ちゃんが彼自身の防衛的に固まった静止状態を放棄し、自らをもっと自由に動かし母親との結びつきに立ち戻ったせいではなからうかと思われれます。

母親は彼を膝の上にとしっかりと抱えることをしていないとき、赤ちゃんはからだと首の辺りを固くし、頭をうしろへとつけざさせます。例えば、4ヶ月目に赤ちゃんは母親の膝の上で裸のまま横たわっておりまして、両足を突き出し、体全体と首を固くして母親の膝の上で弓形になっておりました。彼の両腕は後ろへと大きく伸ばされてもいます。この後ろ向きに身を振る動きは、直に母親の顔への注目すること

でどうやら落ち着きました。彼がからだの筋肉を固く引き締めるのは、赤ちゃんが己れ自身の持てる限りのエネルギーでしっかりと自らを抱える‘コンテナ container’となるための方便であったということになりました。

赤ちゃんが‘情動的に母親に抱えてもらっていない’場合には、いつも傍らに掛かっていた色彩の鮮やかなジャンプスーツ(訳注:ベビー用の上下つなぎ服)に目がゆくのでした。彼はそれにジッと目を凝らします。目でそれにしがみついていたのです。Mrs. ビックは、器官—眼、口、耳、鼻—が、口が乳房にしがみつのように、‘吸収盤 suction pad’として作用していると語っておりますが、この早期の段階で、それぞれの器官が別々の機能をするといったことはありません。それらすべてが己れ自身を一つの纏まりとして感じられるがための付着 adhesion のための吸収盤のようなものと考えられます。

これら最初の4ヶ月間において、赤ちゃんが己れを一つの纏まりとして感じられる方法は主に2つあります。一つは、真ん中の指を乳首のように口に咥えることであります。これは彼の2年目も続けて、ずっとそうでした。例えば、赤ちゃんが2ヶ月半のとき、母親は赤ちゃんのオムツを替えておりました。彼女が彼のその指を彼の口から取り除き、ジャケットを着せようとしてしますと、彼は泣き出します。彼は両腕を興奮したように動かします。足を蹴り出し、首を頻りに動かします。ついには、彼は右手の真ん中の2本の指を見つけ、それらを吸います。私の方を眺めながら…。それから彼は泣き止みました。

もう一つ別の、彼がからだをしっかりと一つになっていると感じられる満足的な方法とは、母親の穏やかで絶えないお喋りに聴き入ることでした。例えば、4ヶ月目のことですが、マットの上に寝かせられて着替えをさせられているとき、彼は2本の真ん中の指を口に咥えておりました。母親は、彼に語りかけを続けております。彼は指を口から離し、笑みがこぼれ出て、それから<グー・アー・ヒー>といった類いの音を連続させ、それから両腕を肩の方に持ち上げてバタバタと揺さぶり、いっそう興奮を募らせてゆきます。母親が彼に話しかけているとき、彼はいっそう音を発します。彼は彼女の声音を繰り返します。母親が彼に話している間は、しっかりと抱えられていると感じるための指をもはや必要としないのです。母親の愛情のミルクは彼のなかへと入ってゆくようでありました。彼はそれを感じとり、そしてそれを聴き入っておりました。彼だけではなく、母親もまたそうであり、まるで乳首がしっかりと口の中にあるように、彼は母親と一体になっていたのです。お互いがじっくりと馴染みあうために母親にしても赤ちゃんにしても時間を大いに必要としていたのです。こうして真正の‘アタッチメント’がまさに展開してまいります。

母親が赤ちゃんの泣き声にあまり迫害感を抱かずにいられるときは、赤ちゃんが何を欲し、どうして欲しいのかを適切に観察することができました。最初の一ヶ月間で赤ちゃんは、‘内なる抱える母親’を摂り込んで、からだをリラックスさせ、そして外界を探索することが出来るようになっております。例えば1ヶ月目のことですが、赤ちゃんの腕は肩の近くに置かれた握りこぶしで彼の胸の辺りで包まれておりました。彼のやや軽く曲げられた脚はじっとしたままで、その足指はその下でしっかりと弓形になっております。彼のお乳の吸い方はとても力強く、オッパイを7分ほど飲んだ後赤ちゃんは腕を伸ばし、まるで指

を花びらが開くように徐々に広げてゆきました。彼のその指先で、彼は母親の着ているブラウスを、そして母親のオッパイをもまさぐってゆきます。母親は彼の指先を撫で、軽く握ってからそれを離します。彼は母親のオッパイから少しづつじつくりと時間を掛けながら手を下ろしてゆきます。これらすべての動作は、‘しがみつ’とか‘すがりつく’に対比しますと、むしろ‘取り込み taking in’といった印象です。これは赤ちゃんの外界の探索であり、そうしたことは母親に情緒的に抱えられているときには可能となるわけであります。

この論文の初めの箇所に、赤ちゃんとその家族についての観察の詳細を挙げておりますが、そこでは赤ちゃんが母親にアタッチして、摂り入れの経験が生じている場合（例えば、赤ちゃんがオッパイの乳首を吸っているとき）と、それとは別に赤ちゃんが動揺を来たし、必死にからだを一つの纏まりとして保とうとして背中を固く強張らせたり、色彩の派手なジャンプスーツに気を奪われたり、また彼の右手の指を口に咥えたりしている場合と、それら両者の違いが明白に際立っております。

そうした赤ちゃんによるカタストロフィ catastrophe を阻まんとする試みの重要な側面といえますのは、彼がまるで半狂乱になって必死に己れ自身を保とうとしているために、いかなる知識も、外界の探索も、母親そして父親との深い関係性をも持ち得ないということであります。こうした固着的な‘しがみつ’の行為は変化に耐えられないのです。ただ同じことが繰り返される repetitive sameness 場合のみ受け入れられるのであります。赤ちゃんが指吸いを己れのからだを一つの纏まりとして保つために使っている場合、もしも母親がその時点で指を取り除くとしたら、赤ちゃんは大いに動揺を来たすでありましょう。いずれにしても赤ちゃんは発達するなかで指を口に咥えることをするでしょうが、それが‘いのちを愛しむため for dear life’に指をしゃぶっているのか、もしくは良き授乳関係を再現せんとして不安感を緩和しながら指に‘吸い付いている sucking on’、‘穏やかにすがりついている holding on’のか、それぞれ区別する必要があります。

赤ちゃんが己れ自身を抱えようと必死で頑張っている姿を、われわれはなかなか大したことと見做すわけですが、あまりにも自らのケアに没頭するとしたら、それも心配です。赤ちゃんは、母親との関係性においてその不確実性に直面するのに彼自らの防御的な防衛を手離すべく十分に安心していられることが必要なのであります。1ヶ月目のオッパイをもらう赤ちゃんの観察記録から、7分ほどお乳を吸ったあと、彼は母親の注意深い、情緒的な抱える授乳を十分に‘摂り込んで’、それで彼自身のからだの防衛、つまり手やら足の筋肉を硬直させることを断念している様子が覗われました。そこから自由に彼は母親を探索する動作へと移っていったわけであります。

赤ちゃんが母親のコンテインメントもしくは‘己れ自身を一つの纏まりとして保つこと’のいずれをも頼みにできないとしたら、己れの不快感を外へと排出せざるを得ません。これは外へ向けられたからだの穴 orifices の部分をとおして為されます。例えば口からの嘔吐やら排便、そしてその眼からの投影、カナキリ声を上げるもしくは泣き叫ぶ、それにいかにも不快感を蹴り出すかのように激しく足を蹴る、又は

すばやく腕を振り回すといったことでもあります。ここで再び、不快感を外へ排出するもしくは弾き出すといったことは、己れ自身を抱え保持するために躍起になっている赤ちゃんの絶え間ない動きからは区別される必要があります。赤ちゃんの顔の表情、それに彼がどんなふうに動作しているか、そのクオリティおよび内容をよく観察することで、こうした判別は可能かと思われれます。例えば、母親が赤ちゃんの着替えをしている間に赤ちゃんに触れることを一時的に止めた場合、彼は足を突き出し蹴ることを始めるかも知れません。赤ちゃんがどれほど不安か、もしくは怒っているか、それにも拠るでしょうが、赤ちゃんは激しく怒り狂って蹴るのかもしれない、またはパニックを呈してこともありましようし、もしくはよりいっそう強く‘己れを保つ held together’のために、そして活発であろうとして蹴ることもあるでしょう。もしくは、母親に抱っこして欲しい旨を伝えるシグナルとして、腕を振り上げて足蹴りをするかも知れません。こんなふうにMrs. ビックは私によく言ったものです。<子どもが足を蹴っているとただじゃダメだね。どんなふうに蹴っているの？>と。。

同様にMrs. ビックは、私の観察能力をもっと高めるように期待され、赤ちゃんをよく知り尽くした母親の感受性がそうであるように、赤ちゃんの泣き声についてもその詳細を描写し、その泣き声のクオリティをもよく理解するようにと指導されました。赤ちゃんが腹痛を起こしてその痛みで泣いている場合の突き刺すような甲高い泣き声、退屈し徐々に眠りへと落ちてゆくときの赤ちゃんの呻くような泣き声、それに、母親がどんなにあやしても背を向けて恐怖に慄いている泣き声とか(この場合、赤ちゃんの全世界が悪いものになったからですが。。)。そうしたことを詳しく描写するようにと要請されたのであります。

不快な経験が排出されない場合ですと、赤ちゃんのからだはコンテナーとして使われます。彼のお尻は真っ赤にオムツかぶれがあり、彼の頭皮は皮膚炎の吹き出ものが出来ます。これは赤ちゃんの心もはや彼が経験している不快な緊張感 tension に耐えられないということを示唆しております。このときころは、箆(ざる)のようなコンテナーとなっており、この動揺を来たしている情動的な経験を保持することも、もしくは不快な感覚を赤ちゃんが耐えられるような情動的な経験へと変容させることも出来ません。このように、明らかに最初の4ヶ月間において、幼い子どもは実にたくさんの不安感に満たされており、従って母親によって情動的に受容され、そしてコンティンされる必要があるわけなのです。

安定へ向けて; 8-16ヶ月目の中間期

この時期、赤ちゃんは外界を知ろうとし、その意味づけをする努力が最高潮となってまいります。

赤ちゃんとその家族: 乳房としての絵本

10ヶ月になった頃、赤ちゃんがぐずった折、母親は直接彼をあやそうとする代わりに、絵本に彼の興味を向けさせようとしします。例えば赤ちゃんが倒れて泣き始めると、ちょっと軽く撫でてやり、それから急いで彼の気を逸らすのです。<ジャン又はここよ。ほらね、何故あんたが泣いてるのかなって思ってるわよ。ほらほら、絵本があるでしょ。泣かないのよ。何でもないでしょ。ほらほらね>といった具合に。。母親が絵本を手渡すとすぐに彼は泣くのを止め、注意深くページを繰るのでした。彼はひっきりなしに

喃語を発しており、〈デーデ〉とやら、彼の寝室にあるアヒルの鳴き声のような音です。彼は本のページの絵を指差し、〈ダー〉と言います。私の方を見遣り、レスポンスを求めます。そして私が彼を見ているのを認めて微笑します。彼は本を閉じ、その背表紙を撫で、それから再びページに目を通します。さらには何度かそれらのページを軽く叩き、それから扉の近くへと這ってゆき、‘イナイナイバー’をし始めます。われわれの眼の前で扉を閉め、声を上げて笑います。

赤ちゃんにとって、絵本との関わり、そしてそれが与えてくれるすべての謎めいた驚きは、象徴的に彼の‘良き内的なオッパイ’との関係性やら、彼に絵本を読んでもくれる愛情深い母親そして父親と一つになること union を意味していたと思われまふ。絵本は愛してくれる良き母親の提供してくれるあらゆるものを蔵する玉手箱 treasure-house なのです。すなわち愛してもらうこと、話し掛けられること、触れられること、そして考えてもらうこと thoughtfulness であります。それで彼は絵本を手に持って、それをまるで‘良きオッパイ’を所有しているかのように撫でるわけなのです。彼は授乳時にオッパイに夢中だったように絵本に夢中になったということになります。それから彼の‘イナイナイバー’の遊びでは、彼は母親との分離 separation を心の内で葛藤し、それに対処せんと試みていたことになりまふ。

‘壊れた繋がり’を巡っての不安感をやわらげるために用いられる知識

赤ちゃんは、ひどく心が落ち着かないときには尚も2つの指を口に咥えがちでありました。しかし年齢が増すにつれて、自分を落ち着かせるのに記憶 memory と知性 intelligence に頼るようになります。彼は何が起きているのかを知ろうとします。家族が日々の日課としてどんなことをするのか、家中にある物たちが、どこにあるのかといった空間的秩序を知り、そしてそれに馴染もうとしています。彼は対象の同一性にしがみつきます。毎度母親の決まったように決まったことをしていることにも、また観察者がいつも同じでいてくれることにも…。そうすることで落ち着いていられたというわけです。もし対象に変化があり、もしくはあるべきところに無いとしたら、もしも母親の日々の日課が彼の記憶した期待している通りでなかったとしたら、彼にとっての馴染みの世界は崩壊しかねないことになります。彼の不安感は募り、慰めを大いに必要とします。彼は母親を必要としている赤ちゃんに過ぎません。が、赤ちゃんは自分に頼ることを学んでまいりましたので、今や観察力そして注意力はありとあらゆるものに鋭敏に向けられてゆきます。

彼が9ヶ月半頃のことでしたが、時計が居間に続く玄関口近くに置いてあった箱から取り除かれたということがありました。赤ちゃんはその箱の近くへと這ってゆきます。そこで立ちどまり、見上げます。それから右手を伸ばして、それから左手をも伸ばし、それを指差しします。〈ダー、ダー〉と声を出しながら…。彼は私を見遣ります。それから箱のあるところに目を遣り、そして〈ダー、ダー〉と繰り返します。彼はそれからゆっくりと廊下を這ってゆきます。母親が彼の方に声掛けをして、やがて廊下を歩いてきたのを認め、彼は這うのを止めて突然カナキリ声をあげて泣き出します。

赤ちゃんがもっと落ち着いているときですと、彼はお喋りとか、イナイナイバーなどのゲームを使って

両親との親密性を再構築させようとする。そうすることで、自分が落っこちていなくなってしまうやら、でも直に拾い上げられ抱えられるといったことに心を奪われながらも、彼はそうした不安感に対処せんと大いに頑張っていたといえましょう。彼はまた「遊び」の中で、‘損傷を与える’とか‘修復する’といった空想にあれこれ心を傾けていたもようでもあります。ここで私は彼がどんな遊びをしていたのかその例を一つ挙げてみましょう。それは、赤ちゃんが10ヶ月の頃、母親の妊娠という事態に遭遇していたことから始まったように見受けられます。

- ・11ヶ月目の遊び；赤ちゃんはミルクをこぼし始め、それが床に流れてゆくのを眺めていました。彼は床に梨を投げ捨て、それを母親が拾い上げるのを眺めています。
- ・12ヶ月目；赤ちゃんは白い糸巻き状のかたちをした男性人形を廊下で見つけ、それを床の上に転がします。それを掴み、床に叩きつけます。それからそれにお喋りをし始めます。後に彼がハイチェアに坐っていたとき、彼は私に微笑し、そのお人形をわざと落とし、それが床に落ちているのを見えています。母親はそれを拾い上げ手渡すと、ハイチェアにそれを叩きつけ、それを思い切り遠くへ投げ、それがどこへ行ったかと目で探します。
- ・16ヶ月目の遊び；以前の遊びに新しい遊びが付け加わります。赤ちゃんは床に小さな馬を放り投げ、それを拾い上げ、軽くキスをし、それからまたそれを放り投げます。
- ・16ヶ月半頃の遊び；赤ちゃんは私の指に包帯で巻かれているのを認めました。彼はそれに優しく触れ、それから再びその傷ついている指に触れて＜オー、オー＞と言います。それから彼は注意深く腰をかがめて、それにキスをしました。彼は母親に＜ジャンヌ、指・・＞と言います。この私の訪問中、何回か彼は私の傷ついた指に言及し、傷ついた指のことを彼が痛く案じてくれていることを示したのです。

赤ちゃんが11ヶ月目から16ヶ月目の間のこれら4つの観察から覗かれることは、赤ちゃんは落っことした対象を取り戻さねばなりませんし、それが何であれ、損傷を来たした場合にはそれは修復されなくてはならないということです。「遊び」は彼によって外なる界を探索し、かつそこで遭遇する葛藤を克服するために使われるのみならず、彼の‘内なる葛藤’を惹き起こす空想を通してワークスルーするために活用されるのであります。彼の「遊び」から、赤ちゃんがどうにか十分なほどの‘抱えてくれる良き母親’を内在化し、それが外界に損傷されたものを認知するのを彼に可能にしているさまが覗われます。この外界における損傷とは、彼の内側で自らの空想上の攻撃をとおして損傷をきたしたものを象徴しているわけです。彼はそれから‘償い reparation’を試みるのです。例えば、男性人形に躁的にキスをするということを通してだったり、また私の傷付いた指に対して情動的な含みを持った抑うつ的な気遣い concern を通してだったり・・。赤ちゃんは己れ自身の破壊的な攻撃性を認め、それで密かに咎めを感じているのです。損傷を償い、そして内なる乳房 internal breast もしくは彼自身の内側の母親を再構築せんとする願いは、これ以降も引き続き彼の遊びのなかで何度も繰り返され観察されていきました。

観察者：家族との関係性（8－16ヶ月の中間期）

母親は、私がやむを得ず訪問の日程を変更したとき、私に見捨てられたと感じました。彼女の振るまいからして、私は訪問を規則的にすることがどんなに彼女に‘コンテインメント containment’を提供するかということに気づかされたのです。いつものように会う約束を破ることは、われわれの関係性を混乱させます。私が訪問予定の時間を変更させますと、母親は、その幼児的な私への転移から、必ずその次の何回かの訪問をキャンセルすることで反応しました。すなわち単純に彼女は私が訪ねたとき不在なのでした。またもし私が赤ちゃんと母親と一緒にいて、赤ちゃんが部屋を出たとき私が彼の後を追うと、彼女は私に無視されたと思い、私を拒絶するという反応をもしました。時に私が電話をして、予め互いに承諾し取り決めたところのその日の時間帯でよろしいかと念押ししますと、彼女は、唯一何とか都合が付くのは今だと言い張りました。つまり電話をしているまさにその瞬間という意味ですが。彼女は必ずや‘授乳時にいてくれる観察者’を希望していたというわけであります。このようにして彼女は待たされるのは厭だと言うことを私に伝えたこととなります。

赤ちゃんは、この一方で、ますます動きもお話しも活発になってゆきます。彼の心では、私は事実上彼の家族の一員であります。11ヶ月目になった頃、彼は私を出迎えたとき、<ママ、パパ、ジャンヌ>と言いました。そして何度も私の訪問の最中にこれらの言葉を繰り返したのです。

観察者：セミナーとの関連に於いて

私は、母親の一見して私を拒絶する態度やら赤ん坊のその行動面において私との関わりに絡んで私が覚えるさまざまな困難をセミナーへ持ち込んでまいりました。私は、セミナーの皆が家族と私との間で何が起きているのかを理解してくれるお蔭でなんとか観察を続けられていたと確信します。私は、つい厄介者 nuisance と感じてしまい、だから訪ねたときに母親が在宅していないのだと思い、だとしたら観察を止めざるを得ないという気持ちになるのでした。私は、母親がたぶん私に拒絶されたという不安感がゆえに私をコンテナとして使っているのかもしれないとは認めることができずにいました。私にしてみれば、私が家族にとって、殊に母親にとって、重要な人になっていることを受け入れることが大変難しかったのです。これは主に、私が母親の私に向けられた‘幼児的な転移’に対処しようとすると、どうにも体が麻痺してしまうからでした。私は、彼女が孤独を感じており、家の中に置き去りにされているとか、私に見捨てられていると思っているといった事実を解釈するなぞ出来ることではありませんでした。私には彼女の‘落っこたされたといった感情 her feelings of being dropped’の投影に耐えられるということを彼女に示すことしか出来ないわけです。Mrs. ビックはまた、私が赤ちゃんの方に目を追うことに忙しく、家族全体に万遍無く目配りをしていないということが母親の問題を助長させているということを私に示唆されました。後に母親は、彼女の孤独感、祖母の死をめぐって感じた悲哀感、そして赤ちゃんの母親であることの困難性とその愉しさについて私に語る事が出来るようになってまいります。これらの母親の私との関わりの進展はおそらくグループが私を支えてくれたお蔭であり、私が母親に殆ど大したことなど語ったりすることはないとしても、私が母親にとってどんなに重要な役割を担っていることかを彼らが理解してくれたことに拠るものと思われまます。

私は最初の頃、観察者として赤ちゃんと一緒に居ても、まるっきり‘木偶(でく)人形 a wooden statue’みたいでした。私は彼と一緒に何かを為すということは全然しておりません。後になってどうにか私は彼と一緒にのこをしたり、自分なりの動きが出来るようになったような気がいたします。それもMrs. ビックが<彼の後を付いていけばいいのよ。自分の方から何かしなくちゃと思わないでね。彼があなたにくれるものは何でももらうことね、彼がそれを取り戻したいと思うまではね。彼がそれを欲しがるまでは、決して彼にそれを戻さなくてはと思わないことだわ>と言ってくれたからなのです。

赤ちゃんは、私の訪問中、しょっちゅう私の方に近寄ってきて私に触り、そして<バイ、バイ>と言います。母親は冗談めかして、おそらく私が彼には<バイバイ>としか言えない人だって彼が思っているんだわと言いました。しかしたとえ沈黙しているにしても、私は彼の心の中でしっかりと存在しているので、でも改めて、観察者が子どもにとって唯そこに規則的に存在していて、大して言葉を発することは無いにしても注意を傾けているということが子どもにとって有意味な機能を為し得ているとはどうにも私には思えないのです。セミナーで、私が赤ちゃんと母親にとって‘心のコンテナーpsychic container’として有益であることが指摘されることで尚更に、新しい赤ん坊が産まれるや否や私が彼の許を去ろうとしていることを考え、つい私としては罪悪感を募らせてゆきました。グループがこの家族にとって私は有益であることを強調すればするほど、私の中では個人的なクライシスが高まってまいりました。<もしも、私が家族にとって貴重な存在ということならば、それに彼らは私にすばらしい学びの経験を与えてくれたわけだし、だとしたらどうやって彼らと別れることができるかしら？観察者としての私がもはや規則的には訪ねてこないということはまだ幼い子どもである彼にどうやって理解させたものかしら？>

破局的な変化を通過して;

(最終段階; 赤ちゃん22-30ヶ月目、新しい赤ちゃん1-8ヶ月目)

<あらゆる発達の段階は、経験から学び、さらには破局的な変化 catastrophic change を通過することを必要とする>; Dr. Donald Meltzer 【Studies in Metasychology】 p. 12

ここに至ってセミナーの参加者人数は減ってゆきました。時には私はセミナーで皆の欲求に即対応 (demand feeding) しなくてはならないといったふうを感じることもあり、観察を終える心の準備はしていたつもりですが、グループの皆は新しい赤ちゃんに興味を覚えており、そのことが私の心に拍車を掛けました。それで私は彼らが引越すのは訪問を続けることを決めたのです。エリック(上の子どもの名前を仮にそうします)は今や22ヶ月目になっており、そして母親にもうこれ以上の訪問は遠慮して欲しいと言われました。新しい赤ちゃんは10日のうちに誕生することになっていました。母親の訪問中止の申し入れに内心戸惑いながら、それでもなんとかもう一度来てもよろしいですか？ちょっとサヨナラを言うだけ…。私は今日が最後というのは気持ちの上で準備が出来てませんのね>とお願いするだけの神経の図太さを持ち合わせておりました。それで母親は渋々ながら承知したわけです。

エリック(22ヶ月目);最後の訪問のつもりでしたので贈り物を持参しました。小さなガラス製の器で

したが、それを母親と父親に差し上げますと、母親の目は涙で溢れ、<まあ、でも貴女がもう来なくなるなんて厭だわ。貴女にもう来ないでって言ったとき、自分が何考えていたのやあって思うの。エリックは貴女が来なくなったらとても悲しむし。貴女は自分に会いに来てくれている人って思っているわけで、それに新しい赤ちゃんが産まれてくることで彼はすでに十分辛い気分ではいるんですもの・・>と言います。われわれは観察を続行することに改めて同意しました。母親は引越しやら新しい赤ん坊のことを含めてあれこれやる事がいっぱいあって、気持ちがもう圧倒されていると語ります。彼女は私の頬にお礼のキスをして、貰ったプレゼントをエリックの手の届かない安全なところに置かなくちゃねと言います。エリックは、その傍らで、<ポート、ねえ、ぼくのポートはどこ？>と言っています。それで母親は、きっとクリスマスに私が彼に贈り物をしたポートのことを思い出したんでしょうねと言います。

こんなふうにして、過去の経験の記憶が蘇り、それでエリックは母親と私とが語らっている話の中へとしばしば加わるようになってまいります。

エリック(22ヶ月);ホリデイ(休暇)という言葉を目にして、彼は言葉を挟みます。<浜辺、浜辺 beach>そして<クッカー、クッカー>とも。母親はこれには驚いて、<ほんとに覚えてるの？浜辺で居たことや、その折に滞在したところのお家にはクッカー(鳩)が居たことを・・>と言います。彼は微笑し、母親が理解してくれたことに興じて、嬉しげに<クッカー、クッカー>と繰り返しました。

母親は、彼の経験に意味を与え続けます。エリックにとって母親の、また私にしても同じですが、注目の的となることは明らかに重要なことなのです。彼は新しい赤ちゃんの登場を巡って葛藤を抱き始めていました。それは、この頃頻りにモノへの攻撃が募っていったこと、そしてそれらのモノの中身に対して執拗に探索しようとするに表れております。この年齢になれば、いずれ子どもは誰もそうしたことはするだろうと思われるかも知れませんが、しかしエリックは明らかに母親の中に赤ちゃんがいることを意識しておりました。

エリック(22ヶ月目);エリックはキッチンでポスケット一杯のプラムやらトマトと一緒に遊んでおりました。彼はそれらを手で拭いて、軽く持ち上げたかと思うとグジャと押し潰し、それからそれらを一つずつ床へ放り投げたのです。そうしながら彼は<トマト、プラムだよ。ほらね、ジャンヌ・・>と言います。母親がそれらを拾い上げ、バスケットに戻しますと、彼はそれらをもう一度撫で、それから再び穏やかながらも床に落としました。母親が彼を叱ると、今度はレンジやらカウンターの辺りに這い上がり、そこに並べてあったスパイスの瓶のコルクを外します。そこは彼には立ち入りを禁止されていた領域であります。彼はその瓶の中を覗きこみ、そしてコルクを元通りに嵌めます。そして母親が彼のからだをカウンターから退かしますとギョツとした顔を一瞬浮かべました。彼はそれから私のハンドバックへと走り寄ります。それを手に持ち上げ、そして急いでそれを元に戻してから、私に飲み物をくれと頼みます。それに引き続き、彼は水屋の上にあったカップに手を伸ばします。その後にはわれわれが座っていたガラス・テーブルの下へと潜り込みます。私の足に触れて、軽く叩きながらクスクス笑いをし、<ハロ

ー、マミー！ハロー、ジャンヌ！>と声をあげます。それから彼はテーブルの下からからだを起こし、興奮したふうにからだをぐるぐる回し始めます。すぐに彼はパズルを取りに駆け出してゆき、それを手にして戻ってきて、母親に<パズルをしてよ。ねえママ、してちょうだい>と言います。

ここ数ヶ月の間、エリックは己れの内なる感情に耐え、心の中に経験を抱える能力を発達させてゆきました。家の中にあるモノたち(プラム、トマト、コルク、私のハンドバック、パズルといったもの)をととも興奮した面持ちで操作しております。それらに彼の内界 internal world の様相を意味づけていたからでしょう。彼はプラムに触り、それをわざと落とします。それから彼が‘バスケット・マミー’から弾き出した一個の小さなプラムに心を掛けます。母親の内に抱える‘中身 contents’、すなわち新しい赤ん坊についての好奇心から、彼はコルクの瓶を開け、中を調べてみます。そしてガラス・テーブルの下も…。彼は母親の心の内側で唯一のものでありたいと躍起になっているのです。母親のすべての注目を得ようとして、母親に<自分も内側へ入れてもらえるのかどうか>と尋ねてみているわけです。

それから彼は母親に、乗合いバスとその内側に車掌さんのいる絵柄の‘パズル’を持ってきて、ピースを嵌めるのに手を貸してと頼みました。こうして自分の破壊の後に、バラバラのピースを嵌め直して、われわれの手を借りて、その内なる対象物を元通り良きものにしてもらいたがったというわけです。彼はパズルの或る部分は上手に自分で嵌めることが出来ましたから、対象を‘元通りにする’ことができるという喜びをいくらか感じたとも言えませんが、最後まですべてを仕上げるところまでには至っておりません。それで彼は、<マミー、ほら、嵌めてよね>と要求したわけなのです。彼は内心大いに気を揉んでいたのです。<新しい赤ん坊がママのお腹の中に陣取っているとしたら、ぼくはどうしたらお母さんの赤ちゃんでいられるのか。それに、ぼくだってママのお腹の中にいちゃいけないのかしら？>と…。

勿論のこと、エリックは近々ナースリー・スクール nursery school に預けられることになっておりましたから、新しい赤ちゃんの誕生を迎えて彼がバラバラ in pieces になってしまうみたいと感じなくとも済むようにご夫婦がしっかりと彼を抱えてあげられるかどうか、私としては気掛かりでした。【結び】の中でも語られていますように、エリックは唯一の赤ちゃんであることから‘お兄ちゃん’になるという立場の変動に直面しようとしていたこととなります。さてここで、エリックの両親が新しい赤ん坊を迎えた事態に対して彼が心理的に適応してゆくさまざまな段階においてどのように援助したかを描写してまいりましょう。

赤ちゃんであること

エリック(25ヶ月目)；新しい赤ちゃん(ダニエルと呼ぶことにいたします)は11週目でした。母親はダニエルに母乳を与えております。エリックはバウンサー(訳注；ベビー用揺り椅子)にからだを横たえ、指吸いをしながら、彼らと向かい合っています。母親は彼に厳しい声でバウンサーから降りなさいと叱りつけました。彼はバウンサーを母親の方へ向けて力任せに押しやりませぬ。この後新しい赤ちゃんがエリックの以前のベッドルームへと連れて行かれますと、彼は両親の寝室へと行き、赤ちゃんの毛布を一枚手に取って、それで彼のテディ人形を包みます。が、うまくゆきませぬ。毛布が落ちてしまうので

す。彼はテディを拾い上げ、母親に「テディを包んでやらなきゃ、そうじゃないと風邪を引いちゃうから・・・」と言いながら、助けを求めます。

エリックの心には、明らかに病気になって今にも死んじまいそうな‘赤ちゃん’がいるみたいでした。‘病気の赤ちゃん’を思い浮かべたのは、赤ちゃんに取って代わりたいたいといった願望を巡っての不安感に関連しているものと思われます。又それは、エリックにしてみれば、新しい赤ちゃんがお乳を与えられている間、埒外の者として‘一人寒々しく置き去りにされている’といった感覚にも繋がっております。

愛情と憎悪のフィーリングの分裂

時としてエリックは彼の愛情と憎悪の感情の葛藤の熾烈さにうまく対処できません。そうした場合は、敵対的な感情をさまざまな関係性へと分裂させてしまうのです。それはすなわち、愛情深い良き関係性をどこかに別のところに保持しておくためになのであります。

エリック(26ヶ月)；エリックはナースリー・スクールに通い始めました。彼は帰宅すると、母親から世話されて入浴を大いに喜びます。彼は「ママ、大好きだよ(I love you mummy)」と言います。これと同じときのことですが、彼はいつものようには私のところに近寄ろうと致しません。そして母親が「ジャンヌにサヨナラって言いなさい」という言付けにも頑として拒んだのです。これは珍しいことでした。

エリック(28ヶ月)；エリックはとても赤ちゃんに愛想よくしています。しかし彼はますます母親に逆らうことが募ってまいります。入浴したり、玩具を片付けなさいと言われていたりするときですが、母親の言うことにいちいち「イヤ！(No)」と言うのです。

エリック(28ヶ月)；エリックは、母親が彼には許さなかった玩具を赤ちゃんにあげたことで怒っています。母親が入浴中に彼のからだを洗ってやろうとすると、エリックはそれを拒みます。彼は私に、「ジャンヌ、洗ってよ」と言います。私が「見てるからね」と返答しますと、彼は自分のからだをいかにも興奮ぎみに、からだのあらゆる部分の名前を言いながら、洗い始めるのでした。

新しい赤ちゃんへの嫉妬心が彼のあらゆる関係性をダメにする

以前ですと、エリックは敵意の矛先を母親もしくは観察者へと向けることで赤ちゃんへの敵意の表出を抑制しがちでありましたが、今やそうした抑制もしなくなりました。しかしながら、赤ちゃんへの身体的な攻撃はためらいがちであり、明らかに赤ちゃんをほんとは傷つけてはならないというのは分かっているらしく、それなりの配慮がエリックにあったことは見て取れました。

エリック(28ヶ月)；母親がエリックと赤ちゃんのために入浴の支度をしているとき、エリックはダニエルに向けてウサギのお人形さんを投げつけます。それからバスタブの中でお湯を口に含ませ、それをダニエルの顔目掛けて吹きかけます。エリックは急いで赤ちゃんダニエルの顔に濡れた顔用のタオルを覆います。その後エリックは何かしら自分が赤ちゃんに痛手を負わせたのではないかと気掛かりであったのは確かです。小さなプラスチック製のカエルさんを手にして、母親に「ほらね、眼が外へ出て

しまってるよ>と言います。事態に折り合いを付けるためでしょう、エリックは、<ダニエルはこれ食べるのが好きなんだよ>と言い、赤ちゃんに小さなプラスチック製の玩具を与えます。

赤ちゃんがその玩具に吸い付くのを眺めているとき、エリックは赤ちゃんがオッパイを吸っているときに感じた嫉妬心を掻き立てられます。母親が赤ちゃんに黄色いプラスチック製の樽を与えようとしますと、エリックは、<ぼく、それ欲しいよ、ママ>とカナキリ声を上げます。彼は母親がその玩具を赤ちゃんの手から取り去り、エリックに与えるまで、泣き叫びを止めません。しかし彼が欲しいのはその玩具というわけではなかったようです。なぜなら母親が別の玩具を赤ちゃんにあげたとき、またもやエリックは涙を浮かべ、必死の形相で、<ぼく、それ欲しいよー。ママー！>と悲鳴をあげたからです。

玩具は、母親のありとあらゆる情動的な豊かさを象徴していたと言えるでしょう。それが今や新しい赤ちゃんに捧げられてしまっており、母親の愛情の分け前を巡って彼は赤ちゃんへの嫉妬心でいっぱいになっていたのです。母親がバスタブから彼を出してあげようとしますと、彼は自分で自分を支えて立とうといたしません。その代わりに、彼は足を上げたままです。カーペットの上にドシンと尻餅を付いてしまいます。それから彼はカーペットに噛み付き、そして<グーグー>とやら頻りに音を発しておりました。

母親が彼のからだを拭いてやった後、エリックは急いで父親に駆け寄り、その膝の上に乗かってどうにか慰めを得ました。そこは新しい赤ちゃんに陣取られていないというわけなのです。

エリック(28ヶ月):エリックは父親に体を寄せて頭を傾け、彼の真ん中の2本の指を咥え、頻りに指吸いをしています。父親は、エリックが普段楽しみにしている就寝前の物語を読んで聞かせてやっております。ところがエリックは絵本に気持ちを集中させることができません。なぜなら、彼の視界には居間で母親が赤ちゃんにお乳をあげているのが見えていて、それに心が奪われていたからです。

エリックの‘良き内なる母親’との関係性は、物語の本に熱心に興味を覚えることで普段は維持されていたのです。しかしながら、たとえ父親の注目を得られていたとしても、それで新しい赤ちゃんが母親のお乳を与えられていることでエリックが抱いた嫉妬心を拭い去ったり、もしくは十分に和らげることはできなかつたもようです。エリックの「母親と一緒に赤ちゃん」への嫉妬心は、本を見たりすることそして父親と一緒にあることの喜びを邪魔していたことにもなりましょう。

大人のパパとの投影同一視

父親は、母親が赤ちゃんを世話している間に、これ迄以上にエリックの方の世話係を担うことを明らかに喜んでおりました。しかしながら父親はどちらかというとエリックの知能の後押しをし、彼の知識もしくは能力をはるかに越えたところのものを敢えてやらせようとする傾向があったのです。エリックにもまた、パパみたいに、大きくありたいという強い願望がありました。こうした願望は或る意味赤ちゃんへの幼児的な嫉妬心を回避せんとする意図も含まれていたと思われます。

エリック(29ヶ月); 父親は、彼とエリックとが一緒にエリックの所有するたくさんのパズルのすべてを完成させたということを得意げに私に語りました。エリックは彼一人で2フット(約60センチ)大のパズルの一つ、ノアの方舟のピースをすべて嵌めたんだとか。今やそれも挑戦2回目で、われわれに彼は<ぼくね、すごく上手にやるんだよ>と自慢したというわけです。彼はスキルの備わった年上の子どもであり、赤ちゃんがとても出来そうにないことを自分は出来るということが嬉しかったのです。

父親はエリックと一緒にアルファベットの歌を歌い、そしてアルファベットの文字を彼に示しました。エリックはそこから正しく赤ちゃんの名前のイニシャルを見つけます。しかしそれから父親は、エリックにパズル時計の絵柄で時刻を教え込むのに15分も費やしました。エリックがどうしても時刻を告げることが出来なかったとき、父親は彼に苛立ち、<アア、もう諦めたよ>と言い放ちます。エリックは、まったくのところ気落ちして、どうしていいか途方に暮れたふうでした。彼はおとなしくなり、気弱そうにくぼく、覚えられない・・・>と言います。当惑して頭をこすっていました。それから彼は、その時計の図柄のパズルをゴジャゴジャにして、それらピースを積みあげたのであります。

もしエリックが父親のように物事を熟知し、何でもよく出来る男の子じゃなければ、自分はもう何のもでもない nothing、落伍者であり、再び赤ちゃんに逆戻りするといったふうにしたみたいで。彼は新しい赤ちゃんが彼の居場所を占めているから、‘赤ちゃんの自分 baby self’の居場所はないという怖れでこころがいっそう惨めになりました。しかしながら、そのほんのしばらく後のことですが、エリックは物事について見極めの付かない赤ちゃんといった傷つきやすい立場から脱しようと試みます。彼は私を味方に付け、‘父親みたいな大きな男の子’がどんなことをやり遂げるか、それを私に見届けさせようと思いました。この際彼のやったことというのは、知性的というよりもむしろ音楽的かつ身体的であります。

エリック(29ヶ月); エリックは、母親が歌手でもある或る友人について話しをしたとき、<う、う、うー>と歌いながら、いかにももったいぶったふうには歩き回りました。彼はそれから<ぼく、ボールを蹴るよ。すごくでっかいボールなんだよ>と言います。母親が私にコーヒーはどうかと勧めてくれたときのことですが、それを耳にして、<ママ、ぼくもコーヒー飲みたい>と彼は要求します。母親が<コーヒーは好きじゃなかったでしょ。リビナかジュースはどうかしら?>と言うと、彼は<イヤ!>と言い、それから断固とした口調で、<ぼく、コーヒーが欲しい>と繰り返しました。

ここでわれわれは、エリックが、時刻を告げることそして時計の図柄のパズルを完成させることで父親みたいな大人としての能力を所有せんと俄然張り切ったことが分かります。彼は彼自身の好みとは別に、父親が飲むもの、つまりコーヒーが欲しいと言い張ります。同時にエリックは自らの赤ちゃん的フィーリングを母親の膝の上に居た赤ちゃんへと投影し、自分とは無関係としたのです。すなわち赤ちゃんだけが、母親のお乳やら、もしくはリビナ、もしくはジュースを欲するといった赤ちゃんでいられるというわけです。エリックは投影的に父親に同一化しており、それというのも‘赤ちゃんの自分 his baby self’が新しい赤ちゃんとの関係で嫉妬心に直面化するのをしばし棚上げにせんがためなものでした。

母親と一緒の‘赤ちゃん’でいられるということ

エリックは、彼一人しばらくでも母親と一緒に話したり遊んだりする機会を持てたとき、そうした満足的な経験を取り込み、それで母親を新しい赤ちゃんと一緒に共有することが出来たといえましょう。

エリック(29ヶ月);エリックは母親と一緒にキッチンにいました。彼女はまだ赤ちゃんにお乳をあげる前で、子どもを腕に抱えて屈んだ恰好で床にこぼれたコーヒーを拭いておりました。エリックは立ったままでそうした彼女を眺めておりましたが、彼女に彼女の空いている方の膝の上に乗っかってもいいかと訊きます。母親は彼にそうさせてやりました。私の眼前で彼女は2人の子どもをそれぞれ膝の上に乗せ、床にしゃがみこんだ恰好でいたのですが、彼女は大笑いし、<まあまあ、これって大した光景だわねえ>と言います。

ここで私が即座に感じ取ったことは、母親がわれわれの最初に会った頃とは格段に変わったということとあります。彼女はエリックが1歳半の頃、抱っこをせがむ彼に応えられませんでした。それが今やエリックがそれをほとんど意識していなかったとしても、彼女は2人の赤ちゃんを膝の上に抱えるだけのスペースを持つ母親になっていたというわけとあります。父親そして私との関係性にも助けられ、エリックは新しい赤ちゃん、ダニエルに纏わる心の痛みをなんとか乗り越えられたもようであります。

カップル coupling(対なるもの);その結びつき

エリック(29ヶ月目);私が庭にいるエリックを眺めていたときのことでしたが、彼は低木から落ちた小さな黄色の花に目を留めました。彼はそれを私に持ってきて、<これ、あなたにだよ>と言って手渡します。それから花壇を見ながら、<ぼく、ママにお花を摘んであげよう>と言います。私たちが室内へと戻った折、私はどちらの花をも母親に手渡しました。でもエリックは、<違う、それはママのじゃない。ジャンヌにだよ>と言います。彼は私にサヨナラのキスをしたがりました。

過去においてエリックが私にサヨナラのキスをしたがったのは、主に、赤ちゃんが母親の膝の上に居て、それで母親から身を遠ざけ、赤ちゃんと一緒に母親から距離を取ろうとしていたときに限ります。今回の訪問では、彼は母親と私のどちらにも愛情深いそして距離のある関係性を保つことが出来たという点で以前とは違っております。彼は乳房の美しさに対してとても繊細であり、それを完全に自分のものとして所有し、そして支配したいという貪欲な願望をも実によく意識しておりました。しかし、ここでは彼は私とママのどちらにもそれぞれのお花をあげたいと思ったのです。彼は‘内なる母親’、すなわちダニエルそして彼自身の双方に心のスペースを持つところの母親という意味ですが、その彼女と同一化しているようであります。彼は、母親と関係のある他の誰か、新しい赤ちゃんやら母親の友人たちに何ら損傷を与えることなしに、彼自らも何かしら貰える可能性を模索し始めたといえましょう。口と乳首、母親と赤ちゃん、母親と父親が彼のこのころの内と一緒にリンクされ、保持され始めております。エリックは花を元の木に戻して欲しいと私に頼みました。元のまま、一緒にさせてあげようというわけとあります。

象徴的遊び; 不安感をおびたフィーリングに対処すべく両親の援助を得るために

家族が新しい都市へと移ったとき、エリックはとても鬱々した気分でありました。殊にナースリー・スクールの遊び仲間を失ったせいでした。赤ちゃんやらその赤ちゃんの両親との関係性から目を逸らすことが出来ないふうで、その緊張感は明らかでありました。

エリック(32ヶ月目)&新しい赤ちゃん(10ヶ月目);ここではエリックの‘怪物’やら赤ちゃんが落下することへの恐怖が表明されております。赤ちゃんは這ってエリックがどこへ行こうとその後を追い、そしてエリックが遊んでいるものは何でも触りたがります。エリックは、<あっちへ行け、ぼくのだ！>と言います。それからエリックは、赤ちゃんへの己れ自身の敵意に不安を覚えます。赤ちゃんが階段の近くへと寄ると、エリックは父親に、<見張ってなきゃ。赤ちゃんが階段から落ちないとも限らないからね・・・>と告げます。父親は笑って、母親が子どもたちの入浴の準備をしている間、階段の上に腰を掛けます。それからエリックは、自分の寝室へと行き、窓の外を眺めます。<あれっ、ほら恐竜があそこに居るぞ。来て来て・・・>と言います。父親は、<ダメだよ。赤ちゃんが階段から落ちないように見張ってなきゃいけないからね・・・>と返事します。エリックはそれから彼のベッドにあったテディを手に取って、父親の傍らに一旦それをもたれかからせ、それから階段の下へと放り投げます。父親は<おやおや、かわいそうなテディなこと・・・>と言います。エリックは興奮したようにケタケタ笑います。彼は父親に、<ねえ、取って来てよ>と半ば命令します。父親が、<ダメだよ、赤ちゃんを見張ってなきゃならないからね>と言いますと、エリックが<じゃあ、ぼく取ってくる>と言います。彼は父親の背中に抱きついて、<ねえ、見ただろ？ぼく、階段から落ちやしなかつただろう・・・>と言います。彼はテディ人形を手に、バスルームへと連れてゆき、そこでそれをバスタブの底の隙間へと潜り込ませました。

それから父親と私が居るところに戻ってきて、<恐竜があそこに居るんだよ。でっかいの。路上の真ん中に陣取っているんだ。2本の歯があるだろ。ほらね、すごく大きいだろ・・・>と言い、窓の外の道路を指さします。それからエリックは、これから隠れるからねと言い、両親のベッドカバーの下に身を隠し、そこから<パパ、ぼく、恐竜から身を隠しているんだよ>と叫びます。父親が部屋の中に入ると、彼は父親も一緒に隠れなきゃと言いつづけます。

こうした振舞いを通してエリックは、母親から離れてしまうとまるで落下するみたいに感じるということを父親に分かせようと懸命であったものと思われれます。エリックは父親の注意を赤ちゃんから逸らし、彼に気持ちを向けさせようと誘っております。父親がエリックの護って欲しいといった願望をあまり深刻に受け止めなかったとき、エリックは恐ろしげな恐竜に身を晒すことになったというわけです。恐竜とは‘結託した悪い内なる両親’の具体的に表現されたものであり、母親はパパと一緒に結託していて、そこにはこうした結託がゆえにエリックが抱いた新しい赤ちゃんへの敵意といった投影が満ち満ちているというわけです。エリックの‘両親というカップル’に対してのサディステックな攻撃性が彼らを怪物的な恐竜へと変じさせたということになります。すなわち彼らは彼に報復的に反撃してくるわけであります。ここで「テディ人形」は、彼の‘傷つきやすい自己’を擬人化しております。‘絶滅した赤ちゃん’であることの恐怖であります。彼の‘赤ちゃんのセルフ baby self’を象徴するところのテディ人形をバスタブの底へと

隠したことからしても、彼の‘脆弱な自己’を防御せんとする秘密裏の工作がどうやら模索されていたもようであります。

この同じ日、こうした入念な遊びの後に尚も敵意そして恐怖に関係づけながら、だがそれも‘迫害感 persecution’というよりむしろ‘思いやり concern’といった趣を増していったように見受けられます。

エリック(32ヶ月)；入浴中、赤ちゃんから玩具を横取りしようと躍起になっていたエリックは、その後父親のもとへと駆け戻って、彼に頭の上のちょっとした傷を見せます。彼はそれから軍用トラックを目にし、それを私のところまで走らせて、<ほらね、車輪が壊れているだろ。直してよ、ジャンヌ>と言います。車輪を嵌めてやったのですが、トラクターはうまく走れません。彼はそれを父親に持ってゆきます。それから彼は、隣の部屋から私の方へ向けて大声で、<ほら、パパが直してくれてるよ。ほくも手を貸してあげてるんだ>と言います。彼は嬉しそうでした。

ここで一つ特筆に値しますことは、エリックが彼の‘外界の良き両親’と私とを自らの恐怖を克服するのに敢えて手伝わせたということであります。これらの恐怖は、彼のもっとしっかりと抱えられていたいというニーズに関連しております。殊に彼の損傷をきたした自己、損傷をきたした弟そして両親に向けての彼の嫉妬心に満ちた攻撃欲に直面して生じたものなのであります。

しかしエリックが葛藤しているのは単純に嫉妬心ということだけではありません。エリックは新しい赤ちゃんが彼自身のアイデンティティーの感覚を奪ったと感じているのです。一人っ子で両親と一緒に居たとき、エリックは彼らに愛される子どもといった感覚を抱くことが出来ていました。ところが赤ちゃんが2人になったとき、赤ちゃんと一緒に遊んでいても、また入浴していても、もしくは赤ちゃんが母親の膝の上でお乳をもらっているのを見ているときでも、エリックは‘赤ちゃん’としてのアイデンティティーの感覚を失ってしまったと感じるのです。彼は自分の新しいアイデンティティーがまだ掴めておりません。つまり年上の子ども、大きなお兄ちゃんといったことですが、それは両親が彼に提供してくれていたところのアイデンティティーである赤ちゃんとも違いますし、それに父親と同じというのでもまったくないわけなのです。

結び

家族の引越して観察は終わりを迎えました。Mrs. ビックとのセミナーの終わりでもありました。私の家族の訪問の終わりは、これほどの長い期間の観察の後ですから、当然ながら観察をどのように終わるかという点で多くの疑問が生じるものと思われました。私としては<この家族との関係性からどのように私は去ってゆけばいいのか？>と悩みました。すぐさま観察者から家族の‘友人’へと切り替わるということは適当ではありません。得てして観察の終了時にはそのような気持ちになりやすいものであります。私としては、今後時折この家族を訪ねることに決めました。それで数ヶ月ほど時を隔ててからならば観察者としてではなく、むしろおそらく友人の一人として訪問するのもいいだろうと判断したわけですが、それに数ヶ月を経てならば、私の観察者として担う役割がなくもないだろうと想像できました。母親からもたらされた幼熟的な転移は記憶に留められているでしょうし、それでもしもその後他に私と家族との

間に何かしらもたらされるとしたら、そのための幾らか余白のスペースは残っているとも思われたのです。

私がこの論文を書く上で目的としましたのは、赤ちゃんが児童期へ向けて情動的に発達してゆくその複雑さを跡付けることではありませんでした。その代わり私は、早期の幼児的不安感、殊に崩壊感そしてアイデンティティーの喪失といった、子どもの心を占める中核的な懸念 preoccupation の幾つかに焦点づけました。それこそが、Mrs. ビックの乳幼児研究の貢献の主要なるものだからであります。子ども及びその両親を観察しそして理解することへの献身をとおして、Mrs. ビックはわれわれがセミナーに熱意を持って参加すべく、意欲を育ててくださったといえましょう。私はしばしばMrs. ビックを懐かしく追憶することがあります。この論文を彼女に献じたいと思います。なぜなら彼女の援助のお蔭があったればこそ、赤ちゃんのこの世界での新しい経験がいかなるものか、それに子育てに直面するご両親にとってもそうした新しい経験がいかなるものか、まさにそれらの衝撃性(インパクト)が意味深くも生き生きとした‘いのち’として私の内にもたらされたと言えるからであります。

Child Psychiatry Department,
Royal Free Hospital, Pond Street London,NW3

参考文献

- Bick,E.(1964) Notes on Infant Observation in Psychoanalytic Training.
International Journal of Psychoanalysis,Vol.45.London
- Cornwell,J.(1983) Crisis and Survival in Infancy, Journal of Child Psychotherapy, Vol.9.
No. 1.pp.25-33.
- Cornwell,J.(1985) The Survival Functions of Primitive Omnipotence,
Int.Journal of Psychoanalysis, Vol.66,No.4,pp. 481-489.
- Harris,M.(1975) Thinking about Infants and Young Children.London: Clunie Press.
- Marris,M.(1982) Growing Points in Psychoanalysis Inspired by the Work of Melanie Klein,
Journal of Child Psychotherapy.Vol.8,No.2,pp.165-184.
- Mgagna,J. (1986) `Della Pell Della Madre', In :Esperienze di Psicoterapia Infantile:
Il Modello Tavistock, ed.Maurizio Pontecorvo. Psycho di G. Martinelli and C.Fiienze.
- Meltzer,D. (1986) Studies in Extended Metapsychology. London: Clunie Press.
- Tustin,F.(1986) Autistic Barriers in Neurotic Patients. London:Karnac Books.

※原典; Three Years of Infant Observation with Mrs. Bick
by Jeanne Magagna
Journal of Child Psychotherapy, 1987, Vol. 13 No. 1

【追補】:この論文は下記の出版物に再録されている。

Surviving Space ;Papers on Infant Obsevation

~Essays on the Centenary of Ester Bick~ (2002),

edited by Andrew Briggs, Karnac. London,

尚、そこには[結び]の前に[セミナーの終わりに]が加筆されている。念のため、ここに追補として載せておく。

セミナーの終わりに

このご夫婦が一人の子どもの親から二人の子どもの親になり、そしてエリックも一人っ子から新しい赤ちゃんとともに家族を分かち合うといった移り変わりを語る中で、Mrs. ビックはアイデンティティーの感覚 a sense of identity の発達、そしてアイデンティティーの感覚の喪失について触れ、それがどれほど深刻な不安感を募らせるものかを強調しておりました。エリックにとって新しいアイデンティティーはまだ身に付かず、それでどれ程不確かな思いであるかについて彼女が叙述していたとき、私も他のセミナーの各自もまたそれぞれ身に及ぶ変化を悟ったのであります。観察の終わり近く、Mrs. ビックはナーシングホームに入居し、そしてセミナーが終了した時点で引退いたしました。その身体的な脆さ、そして切迫した死の予感にも関わらず、彼女は、赤ちゃんの内なる世界の解明をとおして、その至高なる感受性と深い情愛でもって心血を注いでわれわれの成長を促し啓発し続けてくれたのであります。

痛切な思いを抱きながらも私は、今や‘彼女の弟子 her students’であるというわれわれのアイデンティティーも又変わらねばならないことを強く意識したのです。われわれ各自がわれわれ自身の内に、乳幼児観察の先達 teachers としてのアイデンティティーを育てゆかねばなりません。われわれは必ずしもMrs. ビックと‘同じ’でなければならぬと思ふこともないでしょう。乳幼児観察の発展に寄与し得るとしたら飽くまでもわれわれ自身の洞察力を活かすことなのです。今日グループのメンバーたちが顔を合わせますと、あれから20年の時を経て尚も《Mrs. ビックのセミナー》と呼んで、あの頃のMrs. ビックとともにあったときを振り返り、それがどれほど掛け替えの無い‘育ちの経験 growing experience’であったかを懐かしく回顧いたします。われわれはともに子どもとその家族との間の言語的そして非言語的な交わりのプロセスを克明に辿っていったわけですが、彼女は身近に差し迫った死を十全に察しながらも、又そうだからこそ赤ちゃんのそして母親の早期の幼児的不安感について、あれほどにも鋭い感受性と深く豊かな包容力でもって縷々語ってくれたものと忖はれてなりません。

【訳者あとがき】 ~赤ちゃんがその名まえを呼ばれるとき~

山上 千鶴子

どうやら時として、乳幼児観察における観察者(observer)というものは、家族にとって実に‘うっとおしい存在 nuisance’になりかねないようだ。事実しばしばジャンヌは母親との折り合いに躓いている。彼女が訪問の度にこの家族に持ち込んだものがいかなるものかという点だが。その緊張感(ストレス)

は尋常ならざるものであったように覗かれる。それが彼女にはさほど深刻に認知されていない。ここに‘否認 denial’が認められる。この家族と一緒に居ても、ジャンヌの背後にはMrs. ビックの存在がちらちらする。まるで睨まれているみたいに…。それでしくじることは許されない、中断は論外だというわけで、ジャンヌの内的圧迫感はそうとうに熾烈であったろう。当初彼女自ら言うところの‘wooden stature’、つまりは‘木偶(でく)人形’でしかなかったとしてもおよそ不思議ではない。そうした彼女の張り詰めたところ、強張ったからだだが毎回この家庭内に訪問の度に持ち込まれる。それを迎える家族の身になれば抵抗感を覚えなかったはずもなかろう。母親の‘転移’をあれこれ忖度する以前の問題だ。＜母親の心のコンテナー＞としての観察者の役割云々など何やら笑止千万だ。むしろ逆ではなかったか。私自身の乳幼児観察の経験から推して、率直のところそんなふうに見える。事実私の気づかないところでペピとその母親にどれほど私自身が‘コンティン’されていたことか！あの当時を懐かしくそして内心ちょっと忸怩たる思いで振り返る。私はただ無邪気に嬉しく彼らとご一緒させていただいたとばかり思っていたのに…。同様のことがジャンヌについても言えるかどうかは判らない。乳幼児観察の難局に耐え、みごと乗り越えて、それが3年もの長期に及んだという事実は、確かに彼女のいうところの‘神経の図太さ’があったからということになるが、おそらくそれだけでもなかろう。この家族の寛大さ generosity と忍耐が大と思われる。ジャンヌは唯一途に‘観察’に忠実であろうとしてガチガチであったろうから、冗談好きで結構ユーモアのセンスもありそうなご夫婦の目には何とも窮屈で面白味のない人として映ったに違ひなかろう。よくぞまあ我慢をしてくれたもんだと正直なところ私などは感心する。とにもかくにもジャンヌはかなりしぶとくこの家族に居続けた。結局のところ、彼女の‘粘り勝ち’とも言えよう。だから良かったとも言える。こうして論文という体裁で纏められたものは評価に値する。さすがに子どもの発達を追う筋立ては見事といえよう。だが、どうも信念(faith)というものは得てして傍(はた)迷惑なものになりかねない。今や《乳幼児観察》は心理臨床家のトレーニングにおいて必須科目になっており、それは遡れば Mrs. ビックの功績であるのは紛れもない事実だが、いずれにしても過剰な‘自己正当化’は禁物であろう。乳幼児観察の場を提供してくれる家族への感謝を忘れず、飽くまでも謙虚でありたい。

どうやらこのジャンヌの乳幼児観察は、Mrs. ビックの類い稀な、脆くも繊細で、かつ鋭敏な感受性への‘最後の捧げもの’であったと言えそうだ。Mrs. ビックの‘業’の深さ、その執念が後ろで糸を繰っているような…。たとえそうとしても、エリックと Mrs. ビックとの因縁に思いを馳せると実に感銘深いものがある。まさにその悲劇性において…。グジャグジャに潰れた有り様で彼はこの世に誕生した。その彼が健やかに育ち、覇気のある男の子になってゆくさまに(観察者の眼をとおして)彼女は立ち会った。さまざまに虐げられて痛み付けられ、それでもそれらを敢然と撥ね退け、しぶとく生き残り、強運を掴み取り、そして今や老いて死んでゆくとする彼女にとって、それがどれほど慰めになったものかと偲ばれる。エリックへ向けての彼女の＜生きよ！生きてくれ！＞という声にならぬ声が伝わる。このいのちを励ます彼女の息吹きをジャンヌ他、セミナーの面々は浴びたわけだから、そのインパクトは想像に難くない。Mrs. ビックへの崇敬の念はよく解る。そしてそこに些か‘感傷’も覗かれる。だが、この際それもやむを得まい。

ただ一つ気掛かりは、この乳幼児観察にはどこか何かしら‘無理’がありはしなかったかということ。

何よりも読みながら奇異な感を覚えたのは‘赤ちゃん baby’という呼び名である。エリックという赤ちゃんの名まえが出てきたのは、もう一人下に弟が誕生し、赤ちゃんが2人になったとき、紛らわしいので取り敢えずそれぞれに名まえを付けたといった感じで語られている。どうやらMrs.ビックのセミナーでは赤ちゃんはその名まえで呼ばれることはなかったらしい。これは驚きだ！おそらくMrs.ビックがかつてウィーンでシャーロット・ビューラー(Charlotte Buhler)の指導下にあつて子どもの発達研究に携わっていた頃のアカデミズムの名残ともいえようか。観察に厳密な‘客観性’を重んじるといった、彼女らしい気概が覗かれる。そこでは観察者の‘パーソナルな主観性’は排されている。ここに何やら‘無理’がある。

【タヴィストック】の乳幼児観察が、Mrs.ビックからMrs. マーサ・ハリスへと引き継がれてから何が大きく変わったかといえば、おそらくこの点であろう。「経験 experience からの学び」という意味づけ、観察者の‘個人的主体性’がより重要視されてくる。私にとって観察対象は‘ベビー(赤ちゃん)’ではない、飽くまでも‘ペピ’であつたし、セミナー内でもそのようにして共有された。そして観察者(オブザーバー)の私は家族に‘チズコ’と呼ばれていた。帰国後何年か経って頂戴したペピの母親Mrs. P.の私信から、私が今尚も彼らに‘チズコ’と呼ばれて折々に話題になっていることを知らされた。私をよく知らないはずのペピの弟すらも一緒になつて<Our Chizuko(われらのチズコ)>と私を呼び慣わしているんだそうな。。互いに互いがそんなふうに関心の記憶に刻まれている。まさに‘パーソナルな’絆を物語っている。

因みに、【結び】の最後でジャンヌはいみじくも語ってはいないか。<私はいのちに触れた！感じた！見た！>ということ。。《乳幼児観察》とは畢竟、自分の内側に‘いのちの発露’を貰い受け、甦らせることなのだから、この点において私はジャンヌに共感を覚えた。事実、おそらく彼女は徐々に変わっていったのだろう。エリックはMrs.ビックへの‘捧げもの’ではもはやなくなってゆく。ジャンヌ自身が彼とのパーソナルな関わりの中へと一歩踏み込んだ。そしてエリックに向かい合つてゆく。何故にそのように可能になったかといえば、実にそれはエリックが彼女を「ジャンヌ」と呼ぶようになったからだと私は考える。‘一人の人 person’として彼女は彼に捉えられていた。彼が11ヶ月頃以降だが。。そんなふうに関にエリックに「ジャンヌ」と名まえを呼ばれることで、彼女は彼女自身の‘主体’を取り戻したとは言えまいか。もはや‘木偶人形’ではない。Mrs. ビックの‘軛(くびき)’から解かれ、徐々に彼女の窮屈さが薄らいでゆく。そしてここから彼女にとって独自ともいえる家族との関係性の‘未来’は拓かれていったのだろう。そしておそらく彼女にとって、それは一つの僥倖、即ち‘Learning from experience(経験からの学び)’となつたはず。この得難い経験が後の世代へと受け継がれていくことを私は願っている。

観察者が一人の人(person)としてあるということが許されるとしたら、そこに時として危うさも含まれるのを承知しながらも、やはり嬉しさに心躍る。わたしが‘わたし’であることが、そして互いに‘あなた’と呼べるのが、そして呼ばれることが。。このことは《心理臨床》にも繋がる。<あなたは目の前の誰かに対して‘一人の人 person’として出会えるか>ということが試されている。われわれにとっての‘楽観’はここからしか生まれぬ。

(2014/11/10 記)
